

明治後期の尾西地方における津島と一宮の社会基盤整備

岐阜大学 学生会員 ○尾関清太郎
岐阜大学 正会員 出村嘉史

1. はじめに

愛知県尾張西部に位置する一宮市のルーツは、真清田神社の門前町である。明治期に入ると一宮を通る鉄道敷設が盛んに行われ始めた。1886（明治 19）年に東海道線の尾張一宮停車場が開業し、1900（明治 33）年には、尾西鉄道株式会社によって一宮弥富間の路線が開業した。これに伴い繊維工場が多く建設され、工場生産物が門前市であった三八市を急速に発展させた¹。鉄道駅を中心に市街地は拡大し、1921（大正 10）年に市制が施行され、1925（大正 14）年には都市計画法が適用されている。すなわち、一宮は、定期市を有するのみの地方の小集落が、近代になって法定都市計画を施行するほどの都市へ成長した典型的な近代都市の実例であると考えられる。

本研究は、都市を成立させ、成長をもたらす原理はどのようなものであるかを探る考察のための一つのケーススタディとして、一宮が定期市のある小集落から市街地を拡大させ近代都市として成立していく過程を一宮を含む広域な社会基盤形成との関わり焦点を当てて明らかにすることを目的とする。そのために一宮をとりまく市（マーケット）の成立にかかわる流通基盤、関係する立場、産業の構成などを整理し、市街地拡大、工場生産などが起こる必然を説明する。

2. 明治後期の一宮に関わる 2 つの輸送路

一宮の定期市である三八市は、1727（享保 12）年に真清田神社の門前市として成立した²。当初は、生活必需品を取り扱っていたが、次第に綿製品も取引されるなど取扱商品に変化が起きた。明治に入り鉄道が敷設されると三八市の取扱商品の変化はより顕著なものになった。特に、明治後期の尾西鉄道株式会社による一宮津島間の開通は、三八市に大きな影響をもたらした。

一方、尾西鉄道株式会社の設立と同時期に、愛知県では熱田築港が計画され、着工している。流通の



図-1 明治後期の尾張地方

一大拠点として期待され、推し進められた熱田築港も三八市に影響をもたらしたと考えられる。

3. 尾西鉄道について

運営会社である尾西鉄道株式会社は、1896（明治 29）年設立された。1898（明治 31）年には関西鉄道弥富駅と津島を結ぶ路線を開業し、1900（明治 33）年に津島から一宮へ路線を延伸した。表-1³は尾西鉄道株式会社の発起人の一覧である。津島もしくはその周辺出身の人物が多いことわかる。このことから、尾西鉄道株式会社設立には津島側の関係者による意向が強く反映されたと考えられる。

津島は、1889（明治 22）年に三川分流工事に伴って舟運に利用していた佐屋川が廃川になることが決定される⁴。また、佐屋川と木曽川によって陸上交通が阻まれ「僻遠」の地とされていた津島周辺地域では鉄道敷設の機運が高まっていた。そこで、津島の有力者である青樹英二らを中心に尾西鉄道株式会社が設立され、舟運の代役や関西鉄道とつなげること

で一宮や津島周辺の織物業地帯と四日市港や大阪港、神戸港を結び原料や製品の取引を目的としていた。

表-1 尾西鉄道発起人一覧

氏名	住所地	創立時
青樹英二	海西郡東条村	社長
神戸分左衛門	海西郡宝地村	
木村誓太郎	三重県員弁郡稲部村	監査役
水野長一	海東郡津島町	取締役
渡辺新兵衛	海東郡津島町	取締役
岡本清三	海東郡津島町	監査役
友松元太郎	海東郡津島町	
山内民三郎	中島郡祖父江町	取締役
平林儀左衛門	中島郡一宮町	
土川弥七郎	中島郡一宮町	
宮田慎一郎	葉栗郡佐千原村	監査役
天野佐兵衛	西春日井郡新川町	
西川宇吉郎	名古屋市長吉田町	取締役
山田市三郎	中島郡稲沢町	

4. 熱田築港について

名古屋において、鉄道による陸上交通が充実する一方、海上への門戸が開かれずにいた。1883（明治16）年に初代名古屋市長吉田祿在、愛知県議長奥田正香らによって熱田湾に築港の要望が出される⁵。

1894（明治27）年の日清戦争に際し、名古屋は水運の便が悪いことから、軍隊などの輸送に不便な点が多かった。戦時中、広島県の宇品港が重要港となったことに影響を受け、愛知県通常県会で「熱田湾築港の建議」が提出され、築港の機運が高まった。

1896（明治29）年に、当時の愛知県知事である時任為基によって「築港費予算七カ年継続事業」として、築港予算・計画を臨時県会に提出したことから本格的に築港工事が開始された。国庫補助なしでの財源確保、青樹英二ら県会議員による反対運動など様々な問題が生じたが、愛知県の技師である黒田豊太郎や奥田助七郎らによって、1907（明治40）年に名古屋港が開港する。

5. 注目すべき立場

2つの輸送路整備の中心となったそれぞれの地域で何らかの思惑を持って活動している人物たちがいる。その人物たちに注目する。

（1）青樹英二

尾西鉄道株式会社設立の中心人物。津島を中心に津島紡績株式会社や海島銀行などの企業の設立や経営に関わる一方で、県会議員や衆議院議員など政治的な活動を精力的に行っていた⁶。また、津島周辺の地域において自費で新田開発などの農地改良を行い、水郷地帯に蒸気機関を用いた排水機場を設置するなど様々な事業を展開していた。一宮を含む津島周辺において地域振興を考えていた。

（2）奥田正香

名古屋商業会議所の会頭を1893（明治26）年から1913（大正2）年まで就任。名古屋において尾張紡績株式会社や日本車輛製造株式会社などの企業の設立や経営に関わる。名古屋区長吉田祿在に賛同し、熱田築港を提唱する。鉄道誘致や電話架設など様々な事業を行っている⁷。

6. おわりに

尾西鉄道は、津島の意向が強く反映されたもので、熱田築港に関しても、外部的影響力が大きかった。

一宮は、外部の思惑によって交通網が引かれ、集中した。その交通網整備に関わった人物の思惑、当時の主要産業や物流を整理することで、市街地拡大や工場生産を明らかにできると考える。

¹）則武和幸：一宮における鉄道敷設に伴う三八市の変遷，2013

²）川浦康次：三八市場の開市と発展，1954

³）清水武，神田年浩：保存版 尾西線の100年，郷土出版社，1999

⁴）愛知県海部郡佐屋町役場：佐屋町史通史編，1996

⁵）奥田助七郎：名古屋築港史，1953

⁶）著者不明：青樹英二資料集，出版年不明

⁷）亀田忠男：「紡績業の興亡」伊藤田七と奥田正香